

氏 名	おくい もとこ 奥井 素子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6 6 7 号
学位授与の日付	平成 25 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学 位 論 文 題 目	尾形光琳における俵屋宗達の継承について
審 査 委 員	(主査)教授 並木誠士 教授 伊藤 徹 教授 秋富克哉 公益財団法人大和文華館大和文華館学芸部部长 中部義隆

論文内容の要旨

本論文「尾形光琳における俵屋宗達の継承について」は、第Ⅰ部から第Ⅳ部により構成されている。

第Ⅰ部「尾形光琳の伝来資料からの考察」では、光琳の息子の養家である小西家に伝来し、現在は東京国立博物館および大阪市立美術館に分蔵されている「小西家資料」をあらためて検証することにより、光琳の出生、家系、および宗達との関係についての確認をおこない、さらに同資料に含まれる画稿類を分析して、光琳が宗達および宗達工房の作品を写していることを指摘する。

第Ⅱ部「光琳の秋草図にみる宗達及び工房や相説との関係」では、光琳が、画業の初期では宗達の和歌巻や『嵯峨本』のデザイン、あるいは宗達の後継者である喜多川相説の様式を取り入れていることを指摘する。とくに、光琳筆「秋草図屏風」については、元禄時代に書かれた史料から、宗達の秋草図が流行していたことを指摘し、そのうえで、光琳が宗達様式の秋草図を手掛けたとする。

第Ⅲ部「俵屋宗達及び工房の作品を写した屏風」は、第1章「風神雷神図屏風」、第2章「尾形光琳筆「槇樹図屏風」の考察」、第3章「松島図屏風」にわかれる。

これら3作品については、これまでの研究では、光琳が宗達作品の存在を知り、実見し、感動して模写したと語られてきた。それに対して、これらの章では、光琳作品と宗達作品の画像をコンピュータ画面で重ねるなどして比較し、両者の構図、色彩、描き方などの相違点と共通点をあげ、さらに、光琳の他の作品とも比較することにより、両者の相違点こそが光琳の特徴であり、独自性を示す点であることを明らかにする。具体的には、光琳は宗達作品の下絵を用いつつ、構図も描き方も色彩も採用せず、光琳独自のやり方で描いていることを指摘する。

これらの章では、光琳が写した工程について、光琳はなんらかの宗達作品の下絵を使用し、輪郭線を使いつつ、その他は自分の手法で描いているという新たな見解が提出されている。

第Ⅳ部「その他の継承」は「西行物語絵巻」「技法」の2章からなる。

光琳の「西行物語絵巻」(宮内庁三の丸尚蔵館蔵)に関しては、宗達の渡辺家本をそのまま写していることが明らかにされ、光琳が宗達画の複製を作っていることを指摘する。技法に関しては、宗達が創始したとされる「たらし込み」技法の光琳における継承を指摘している。

これらの作業により、光琳の画風形成に果たした宗達の役割、さらには、その継承の方法、そして、そこから光琳が生み出した独自性が導き出され、これまでの定説とは異なる新しい光琳像が提示される。

論文審査の結果の要旨

本論文は、京都の高級呉服商雁金屋の二男として生まれた尾形光琳（1658～1716）が、先行する俵屋宗達（生没年未詳）の作品および作風をどのように継承したのか、という琳派研究にとって最大と言ってよい問題を、コンピュータによる画像解析を含めた実証的手法で解明しようとしたものである。

本論では、光琳画業の初期においては、宗達の和歌巻や『嵯峨本』のデザイン、あるいは宗達の後継者である喜多川相説の様式を取り入れていることがまず指摘される。具体的には、光琳筆「秋草図屏風」が、文献史料から元禄年間における宗達の秋草図の流行を指摘し、そのうえで、光琳がその再生を試みたと指摘する。

本論の中核をなす部分は、光琳が宗達及び宗達工房の作品を写した屏風「松島図屏風」（ボストン美術館蔵、大英博物館蔵他数点）、「槇楓図屏風」（東京藝術大学美術館蔵）、「風神雷神図屏風」（東京国立博物館蔵）についての分析であり、ここでは、光琳が宗達の下絵を継承して制作した可能性を、画像解析の成果として新しく提示している。光琳の制作工程を、両者の構図、色彩、描き方等々の比較検討から、相違点と共通点をあげて具体的に検証する方法は説得力がある。そのうえで、光琳の他の作品とも比較することにより、宗達との相違点こそが光琳の様式的特徴であり、独自性を発揮した部分であることを指摘している。

上記の作業により、光琳が宗達画を模写（臨模）したという従来の見方を否定し、光琳がなんらかの宗達作品の下絵を使用し、輪郭線を使いつつ、その他は自分の手法で描いていることを明らかにしている。

光琳の画風形成には、宗達、光悦、山本素軒、松花堂昭乗、狩野派、雪舟、さらに蒔絵や衣装雛形などさまざまな影響があると言われているが、本論文ではもっとも核心的である宗達に絞って、実証的な方法により比較検討をおこない、新たな見解を導き出している。

上記のように、本論文は基礎的な作業を踏まえて、さらに独自の視点からの考察を展開したものとして、十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の 2 論文（①②）として、すでに公表されている。

①奥井素子：「尾形光琳筆『風神雷神図屏風』の模写工程の考察－俵屋宗達筆『風神雷神図屏風』との比較からみる－」美学会誌『美学』第 61 巻第 1 号、85 頁-96 頁（2010 年）

②奥井素子：「尾形光琳「風神雷神図屏風の考察－光琳の改変を読み解く－」意匠学会誌『デザイン理論』第 60 号、19 頁-32 頁（2012 年）